静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関するアンケート調査結果
－平成29年度－

平成31年3月30日

白木賢信（常葉大学）

Ⅰ　調査結果の概要

1.　利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）については、小学校相当が殆どを占めつつある。例えば、「小学校」では、1～3年目は20%台であったが、11年目で60%台に達し、「7～12歳」では、4年目までは50%前後であったが、11年目は8割近くに達している。

2.　利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は11年間を通じて常に最も比率の高い項目で、特に8年目からは70%前後に達している。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10%台で推移している。その達成度については、「だいたい期待通りできるようになった」は11年間を通じて70%以上の比率である。「期待以上にできるようになった」は5年目までは10%台で推移していたが、特に9年目以降は20%台に達している。

3.　利用後の参加者の変容について、「周りの人に優しく接するようになった」について述べると、その比率は11年間で18ポイント上昇している。「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」および「仕事などを積極的にするようになった」も同様の傾向で、11年間でそれぞれ13ポイント、12ポイント高まっている。

4.　繰り返し利用することによって予想される変容について、調査が行われた10年間とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」が上位3項目で変わりない。但し、2年目（調査初年度）と10年目の比率差については、「時間を守るようになる」と「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」は10ポイント以内の差である一方、「周りの人に優しく接するようになる」は14ポイント高くなっている。

Ⅱ　調査の概要

1.　目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果の一端を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示する。あわせて、平成19～29年度の11年間における経年変化の傾向も提示することにしたい。

2.　内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

（1）利用団体の種類
（2）利用団体の主たる年齢層
（3）利用宿泊数
（4）利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
（5）利用目標の達成度
（6）利用後の参加者の変容
（7）繰り返し利用することによって予想される変容

3.　対象

平成29年度のセンター利用団体

4.　方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は次の通り。

（1）センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙を配付する。
（2）各利用団体担当者は、センター利用後約1ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

5.　調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率）　111（18%）　　有効回収率　111（18%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成29年度における統計上のセンター利用団体数（627団体）を母数としている。

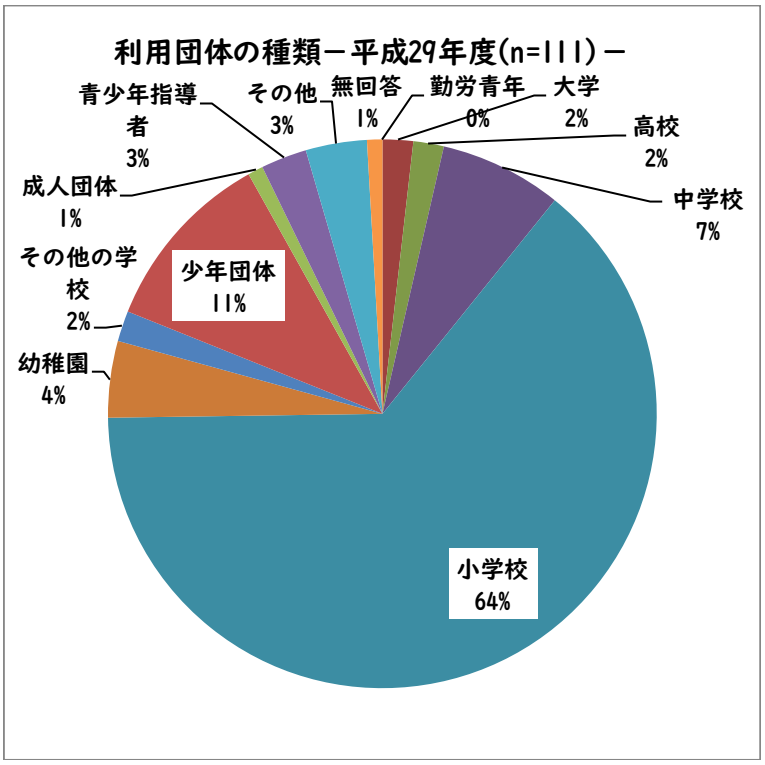
6.　実施期間

平成29年4月～平成30年3月

Ⅲ　調査の結果

1.　利用団体のプロフィール

最初に、本調査の対象となった利用団体のプロフィールについて述べることにしよう。まず、利用団体の種類についてであるが（図1)、最も比率が高いのは「小学校」(64%）で、次いで「少年団体」（11%)、「中学校」(7%)、と続いている。なお、学校関係は全体の約8割を占めている。



「その他」の内訳

子ども登山教室(静岡市体育協会補助事業)，知的障がい者団体，地方自治体，民間学童団体

図1　利用団体の種類

この利用団体の種類の11年間の変化について示したものが図2である。これによると、「小学校」は、1～3年目は20%台、4～7年目は30%台で推移しているが、8年目で40%台、9～10年目で50%台に達し、11年目で60%台に達している。「少年団体」は、8年目までは概ね20%前後で推移しているが、9年目以降は10%前後となっている。「中学校」も同様の傾向で、1～7年目は10%台、8年目以降は1ケタ台の比率で推移している。

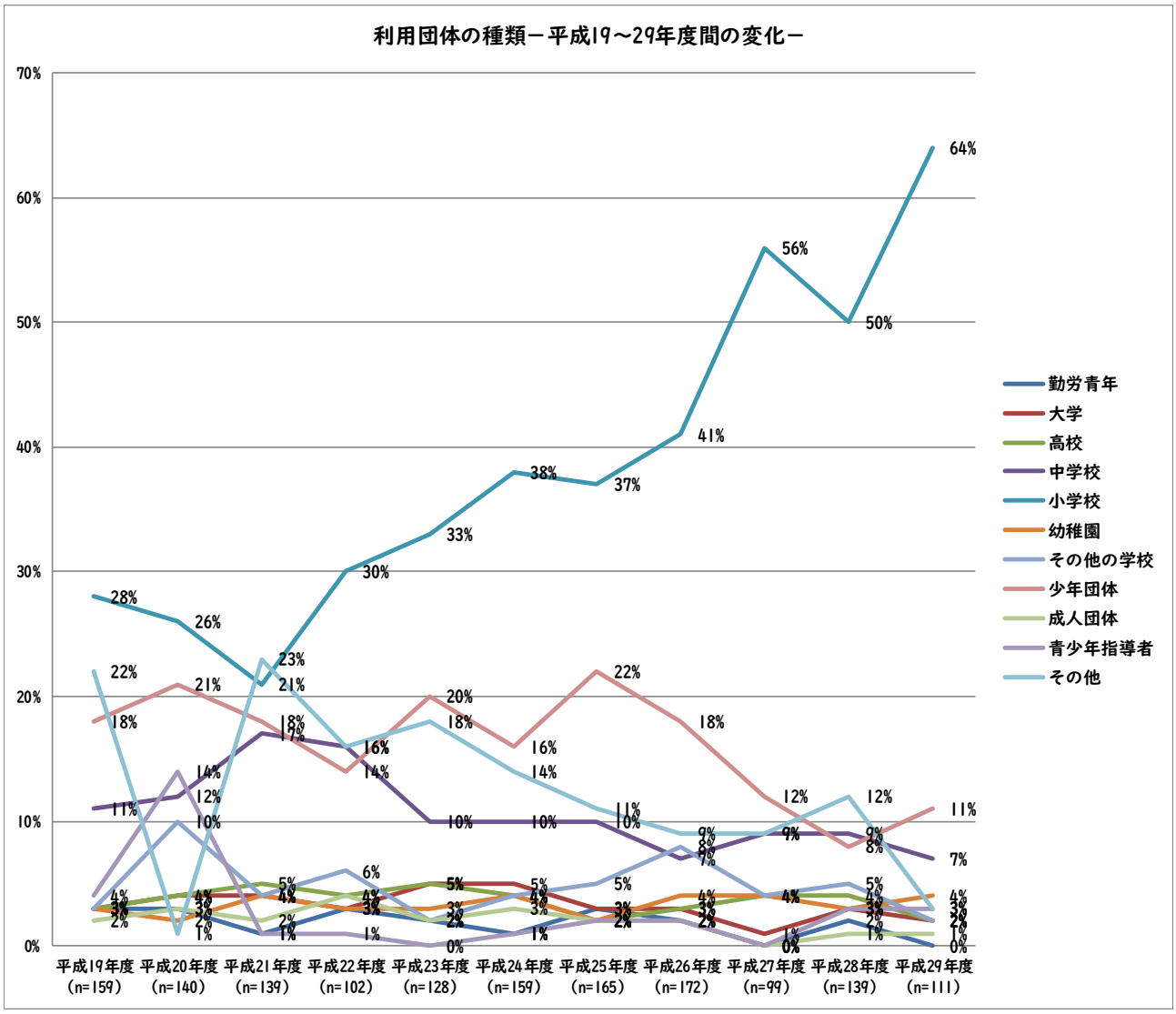


図2　利用団体の種類－平成19～29年度間の変化－

次に、利用団体の主たる年齢層について（図3)、最も比率の高いのは「7～12歳」（79%）で、次いで高いのは「13～18歳」（12%）で、両者で全体の9割を占めている。

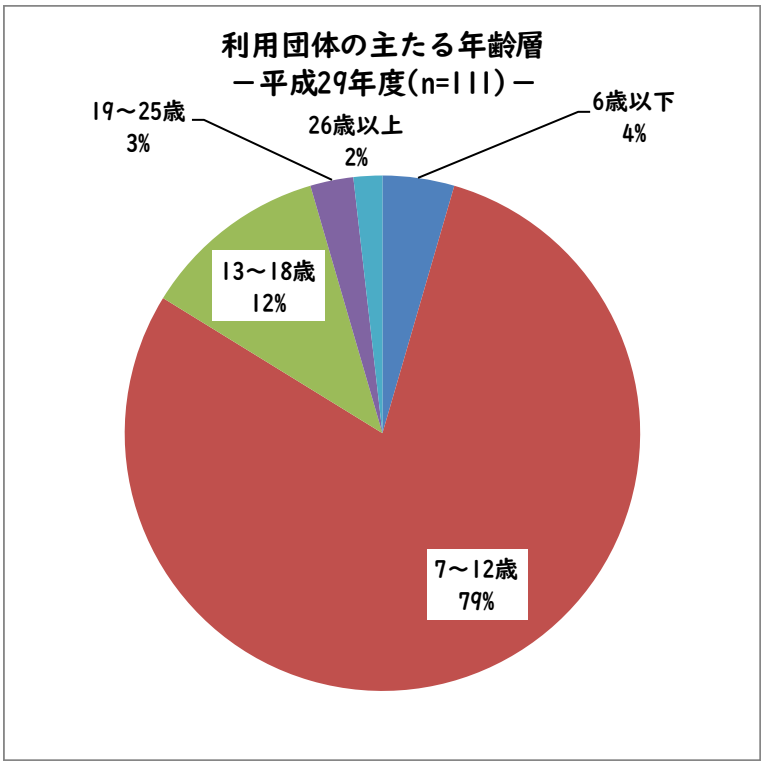


図3　利用団体の主たる年齢層

この利用団体の主たる年齢層を11年間の変化でみると（図4)、「7～12歳」は、4年目までは50%前後で推移し、5年目以降は60%を超え、11年目は8割近くに達している。一方、「13～18歳」は、5年目までは20%台、6年目以降は10%台後半で推移しているが、11年目は12%までに落ち込んでいる。なお、その他のカテゴリーは、概ね1ケタ台の比率で推移している。

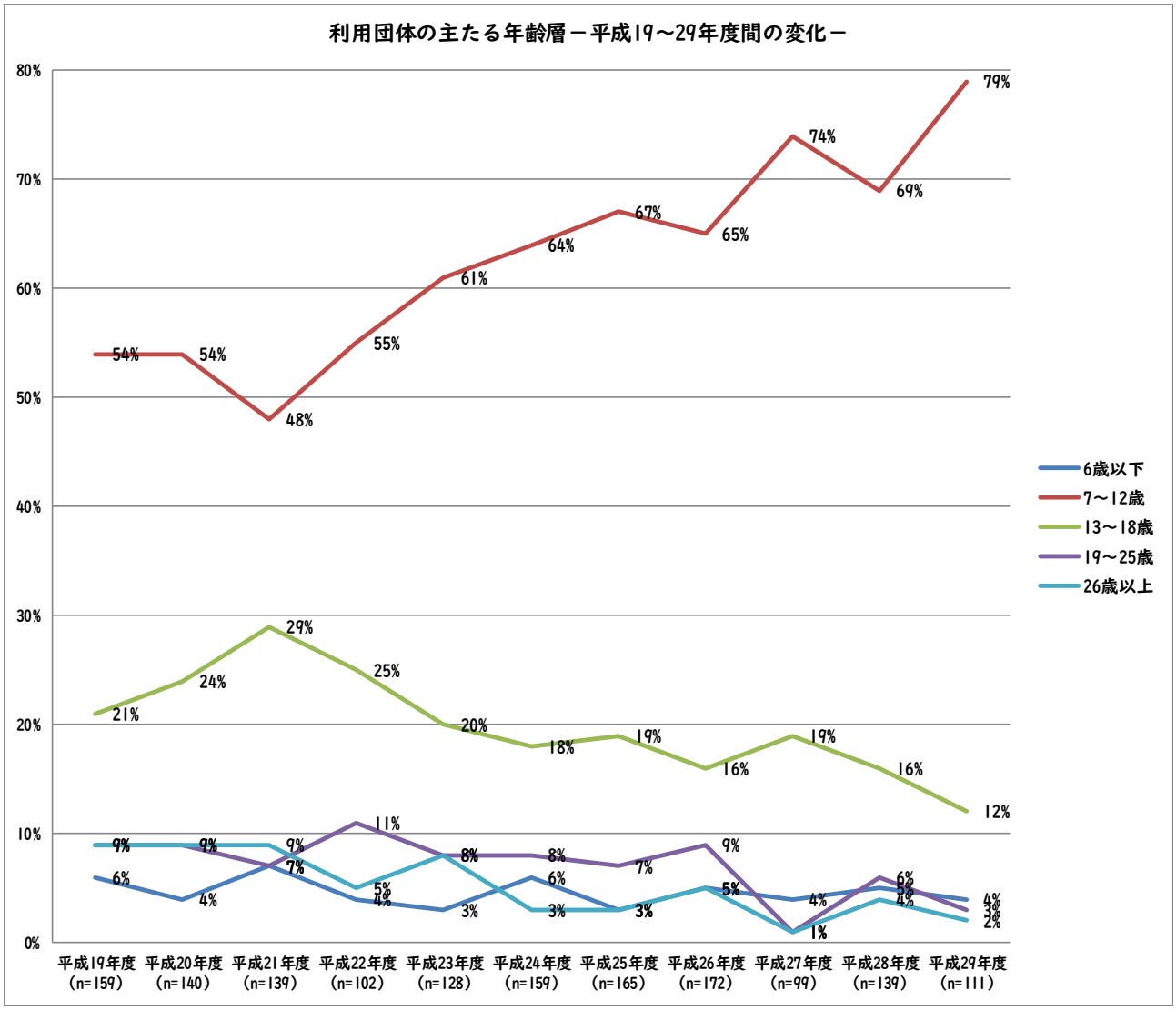


図4　利用団体の主たる年齢層－平成19～29年度間の変化－

さらに利用宿泊数については（図5)、「2泊」に比率が最も高く（54%)、次いで高いのは「1泊」(39%）である。なお、両者で全体の9割以上を占めている。

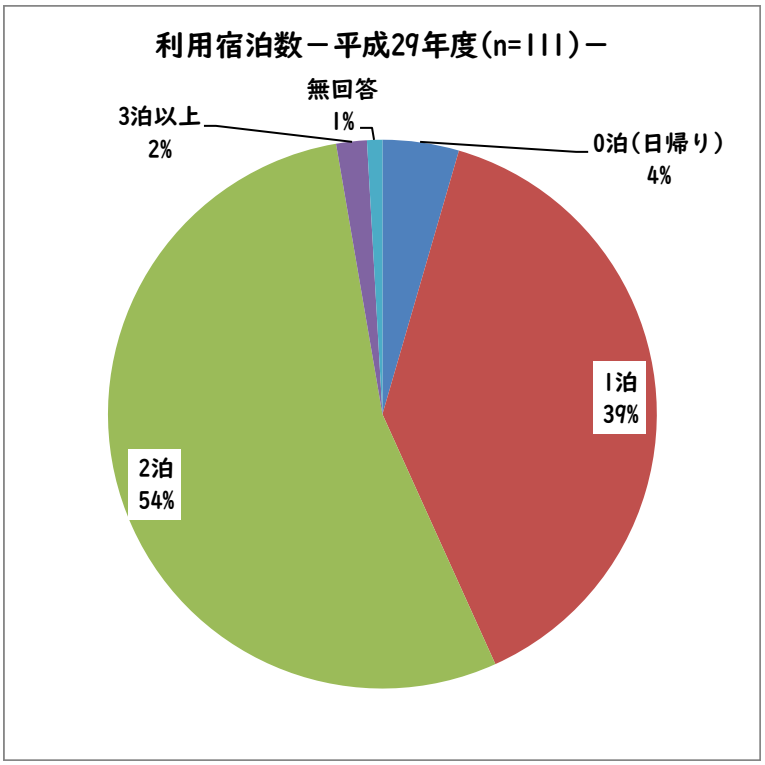


図5　利用宿泊数

この利用宿泊数を11年間の変化でみると（図6)、8年目までは「1泊」が最も高い比率で、9年目以降は「2泊」が最も高くなっている。

なお、「1泊」と「2泊」の全体における占有率は、2年目までは7割台、3～6年目は8割台、7年目以降は9割台で推移している。一方、「0泊（日帰り)」と「3泊以上」の占有率については、2年目までは2割を超えていたが、3～8年目は概ね1割台、9年目以降は1ケタ台の比率で推移している。

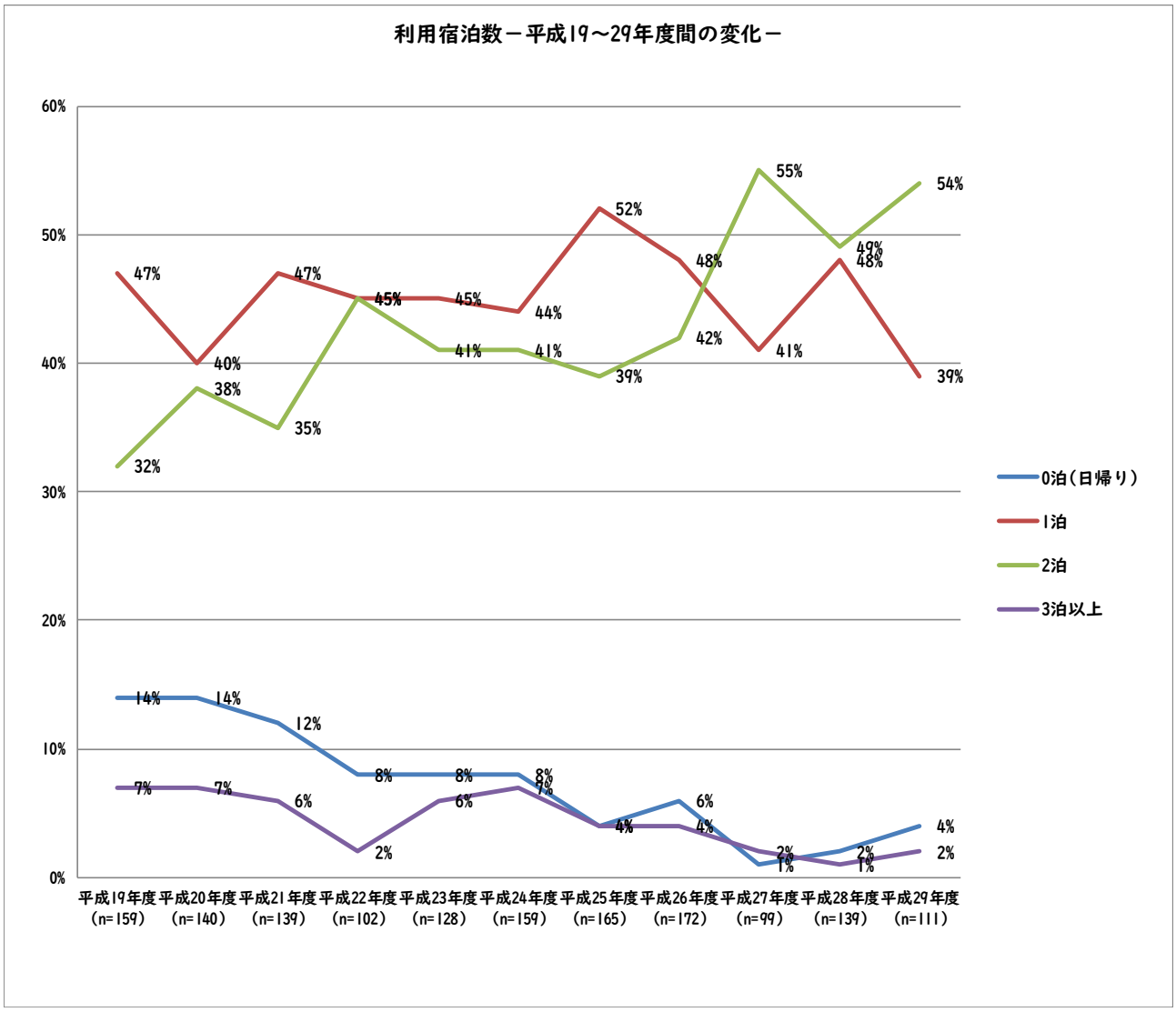


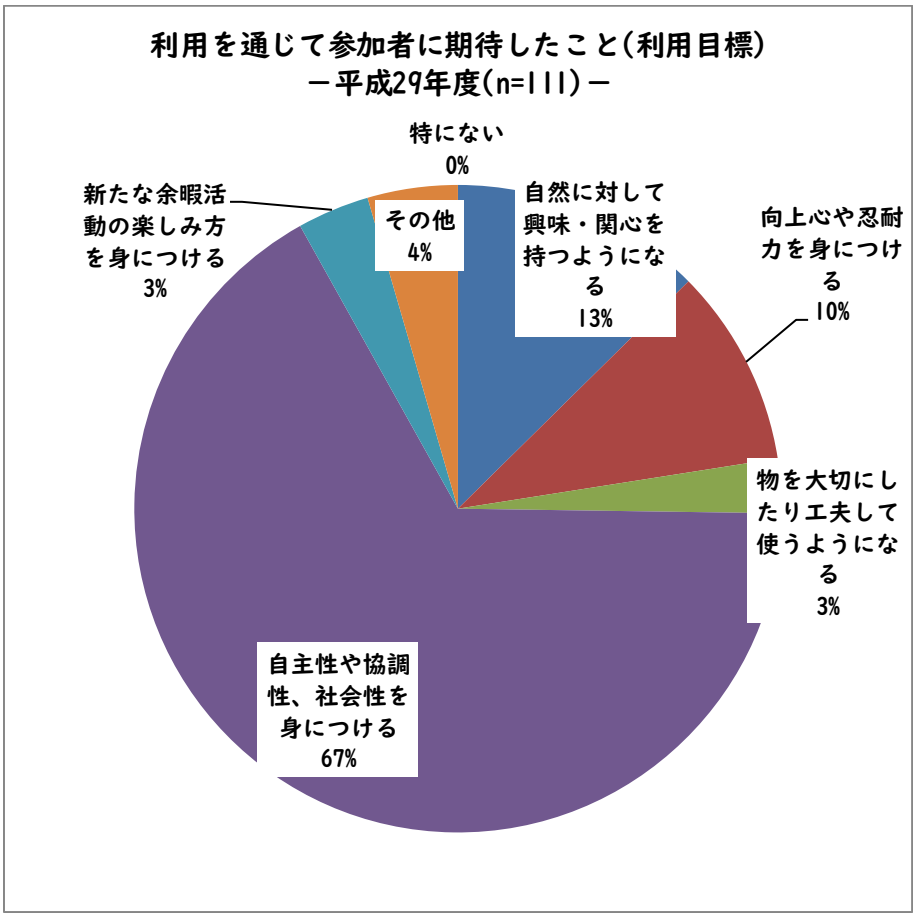
図6　利用宿泊数－平成19～29年度間の変化－

2.　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

ここでは、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を取り上げるが、ここでの項目は、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（平成8年7月24日）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした。上記会議および報告については下記URLを参照（平成31年3月30日現在）。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm

図7で示されるように、最も比率の高い利用目標は「自主性や協調性、社会性を身につける」（67%）が全体の約2/3を占めていて、次いで「自然に対して興味・関心を持つようになる」（13%）、「向上心や忍耐力を身につける」（10%）が続いている。



「その他」の内訳

英会話を通して、英語に慣れ親しんでもらいたい，英語に親しみを感じ、コミュニケーションの道具であることを感じる，自己理解･他者理解を深める，指導者としての資質能力の向上，他校の児童との交流を図る，リーダーとしての資質を高める

図7　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標の11年間の変化については（図8)、「自主性や協調性、社会性を身につける」は11年間を通じて常に最も比率の高い項目である。4年目以降は60%以上の比率で推移し、特に8年目からは70%前後に達している。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10%台で推移している。

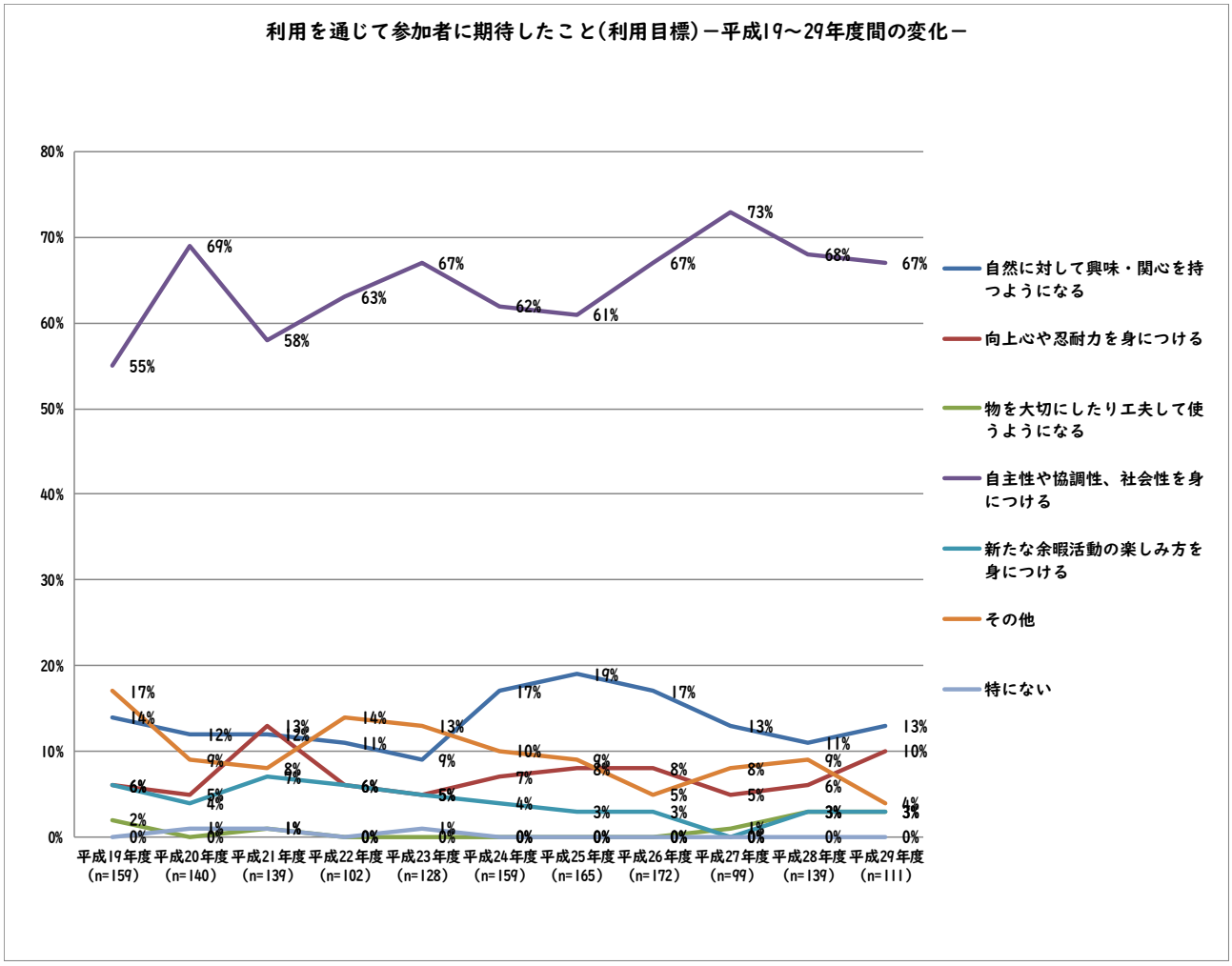


図8　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）－平成19～29年度間の変化－

3.　利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」の4段階のいずれかで各団体自身が判断している（回答者は利用団体担当者である。なお、回答者の選定は各団体の任意による）。

その結果、図9の通り、「だいたい期待通りできるようになった」の比率が最も高く（70%）、次いで高いのは「期待以上にできるようになった」の29%で、両者の合計がほぼ全体を占めている。

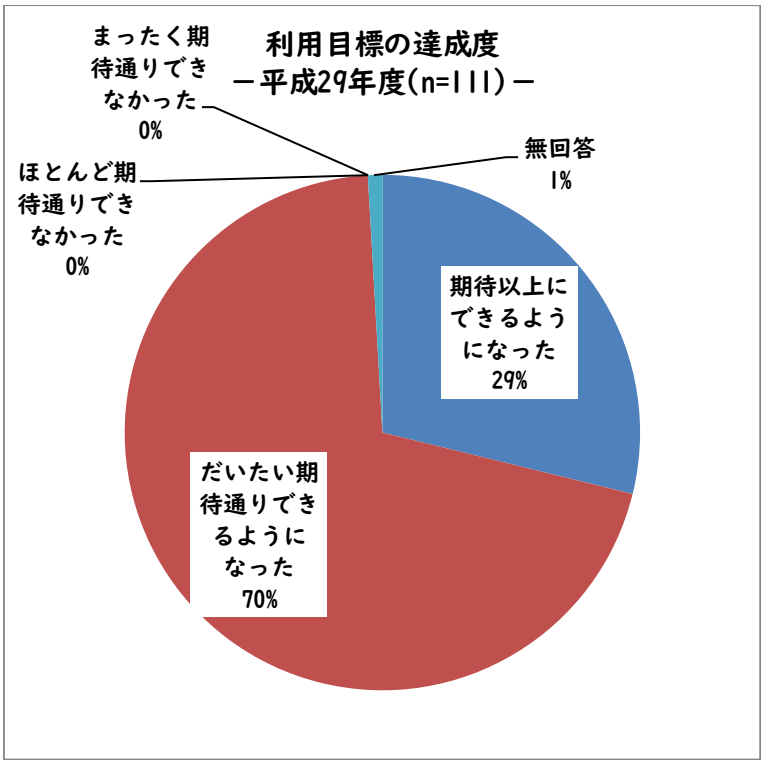


図9　利用目標の達成度

この達成度の10年間の変化については（図10）、「だいたい期待通りできるようになった」は11年間を通じて70%以上の比率である。「期待以上にできるようになった」は5年目までは10%台で推移していたが、特に9年目以降は20%台に達している。

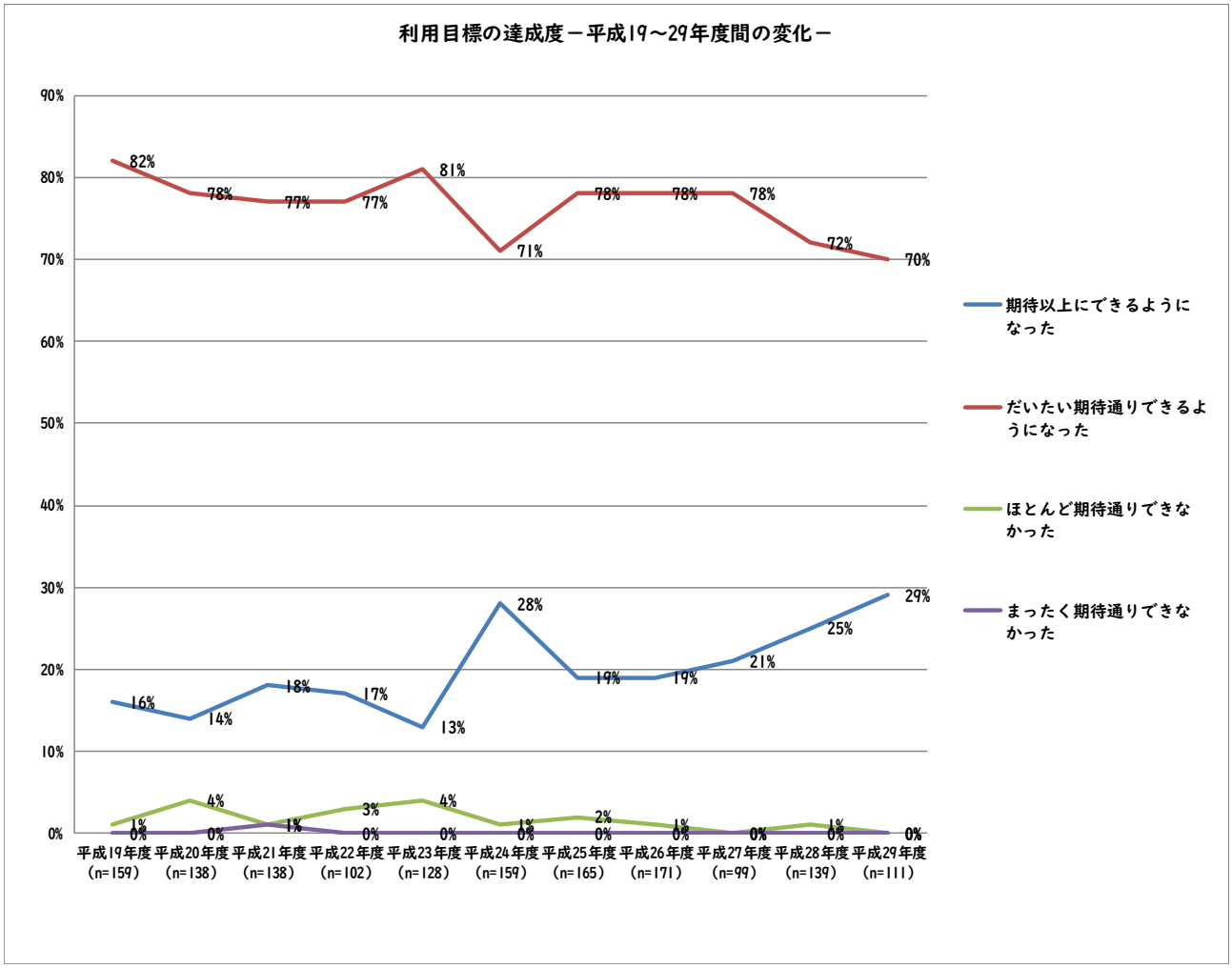
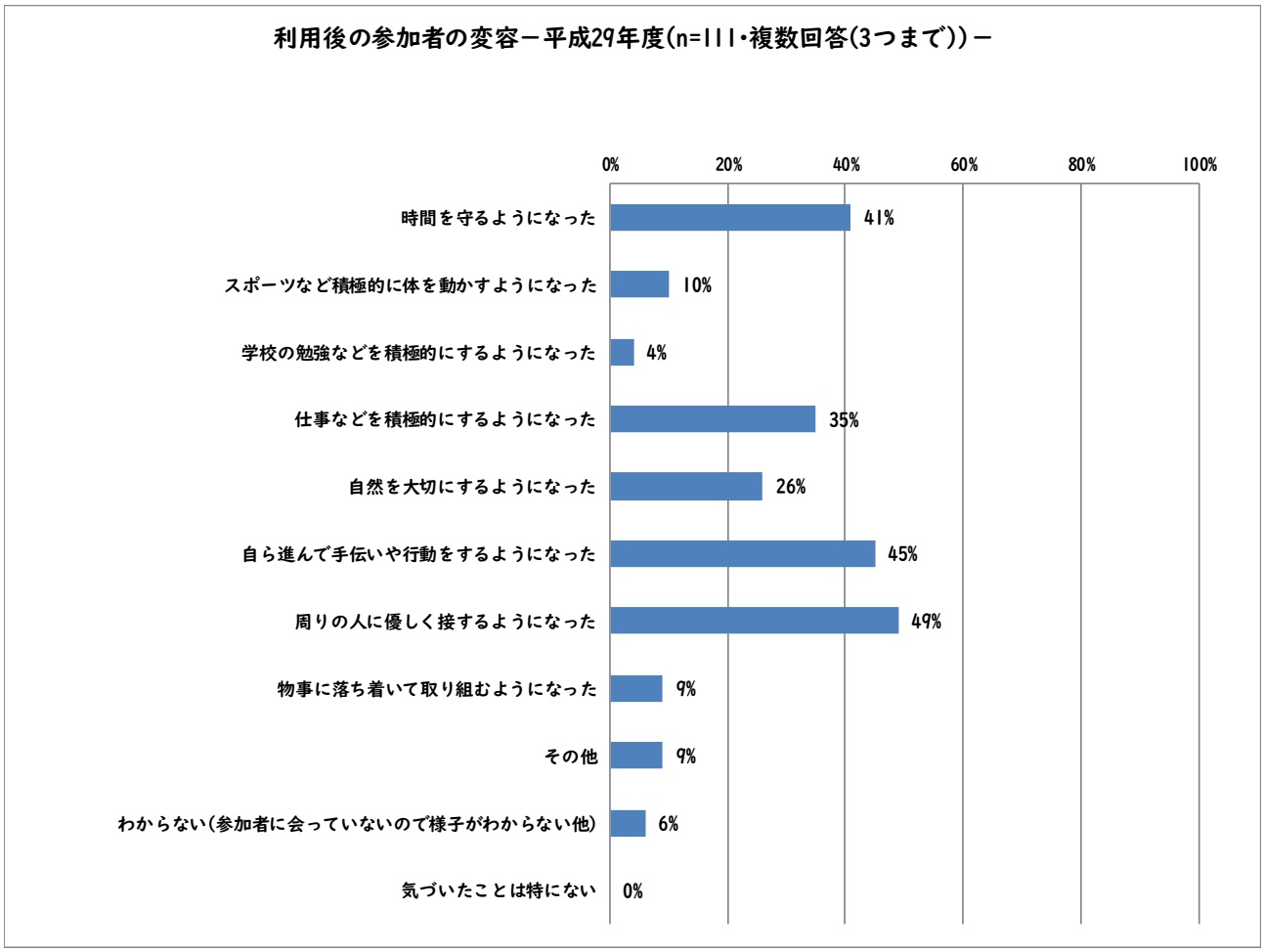


図10　利用目標の達成度－平成19～29年度間の変化－

4.　利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後1ヶ月以内の変容について利用団体担当者が分かる範囲で捉えているが（複数回答・3つまで）、その結果は、「周りの人に優しく接するようになった」（49%）が最も高く、次いで「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」（45%）、「時間を守るようになった」（41%）の順に高くなっている（図11参照）。



「その他」の内訳

あいさつができるようになった，あいさつや返事がよくなった，一部の生徒だが周囲のことを気にかけるようになった，感謝の気持ちがある，自分たちの力でやり抜いたという自信がもてた，スケートに興味を持って、またやりたいと言う子どもが多い，団員の親睦，友達関係が深まった，粘り強く取り組む，周りを意識できるようになった

図11　利用後の参加者の変容

この11年間の変化について（図12)、「周りの人に優しく接するようになった」の比率は、8年目までは概ね30%台、9年目以降は40%台で推移しており、11年間で18ポイント上昇している。「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」も同様の傾向で、11年間で13ポイント高くなっている。「仕事などを積極的にするようになった」の比率も、7年目までは20%台、8年目以降は30%台で推移しており、11年間で12ポイント高まっている。

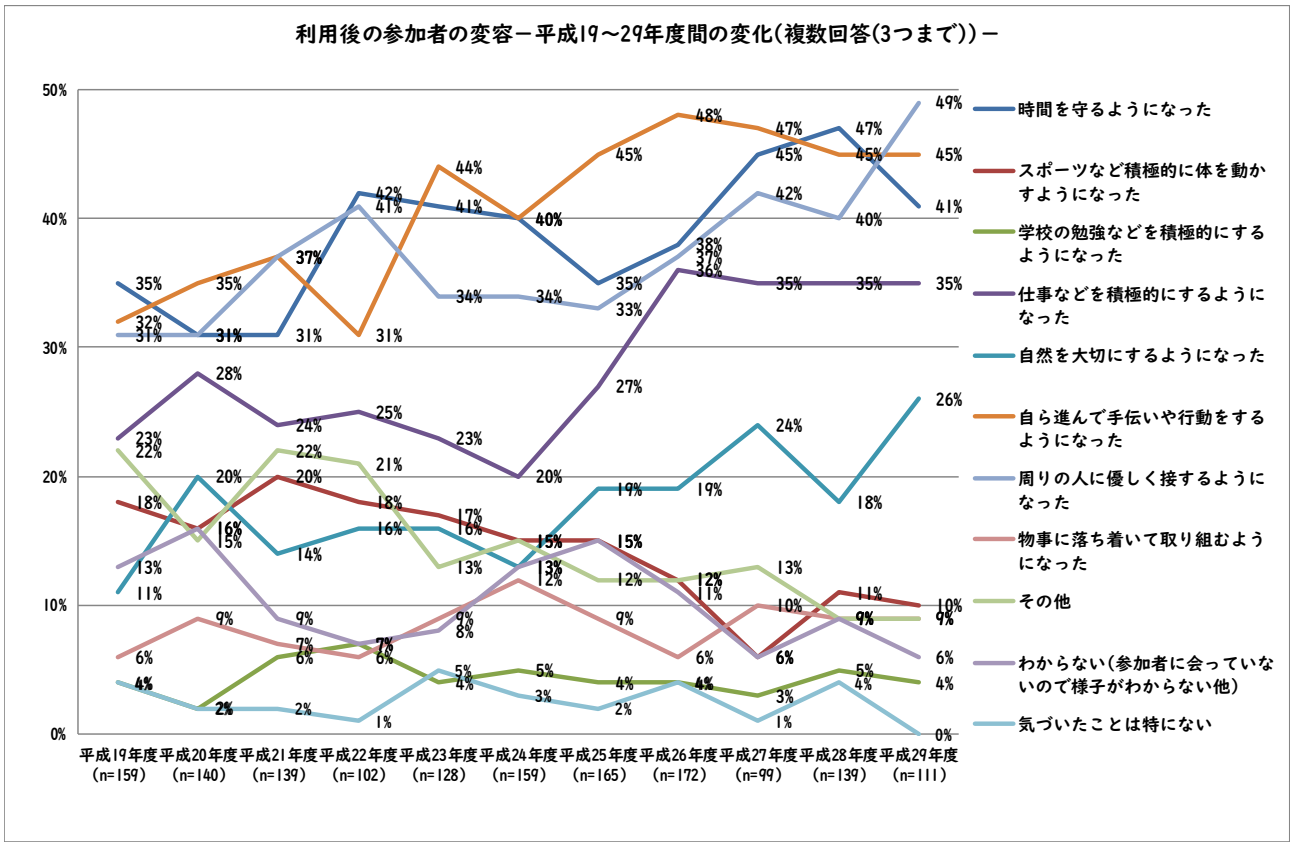
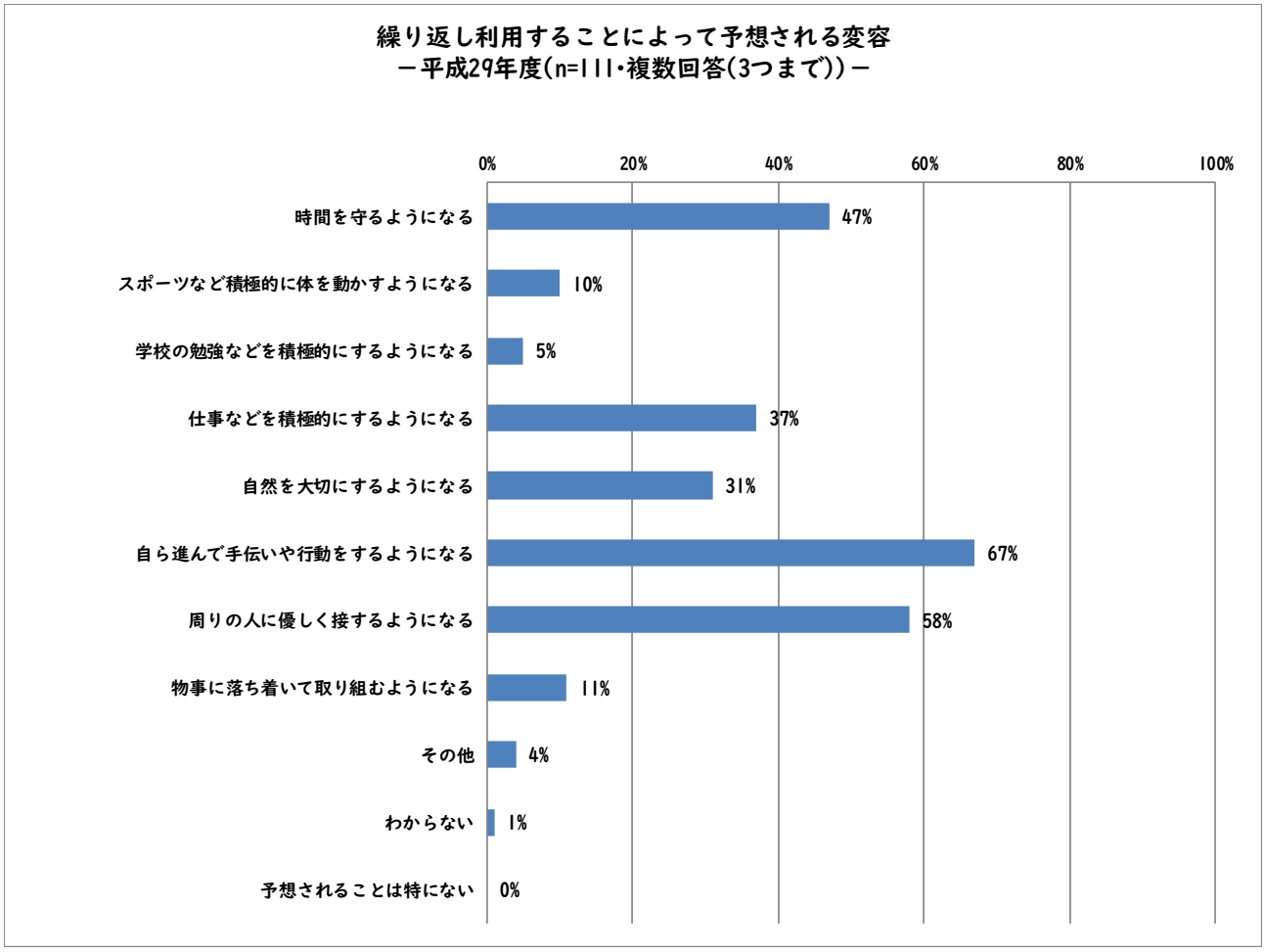


図12　利用後の参加者の変容－平成19～29年度間の変化－

5.　繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えている（複数回答・3つまで）。その結果（図13）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」の比率が最も高く（67%）、次いで「周りの人に優しく接するようになる」（58%）、「時間を守るようになる」（47%）が続いている。



「その他」の内訳

英語に親しみを感じるようになる，協力したり、あきらめずに最後までやりとげたりするようになる，自己肯定感が高まる，自立心

図13　繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は2年目から加わった項目であるため、図14の通り10年間の変化を示すことになるが、それによると10年間通じて、「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わりない。但し、2年目（調査初年度）と10年目の比率差を比較すると、「時間を守るようになる」と「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」は差が10ポイント以内であるが、「周りの人に優しく接するようになる」は14ポイント高くなっている。

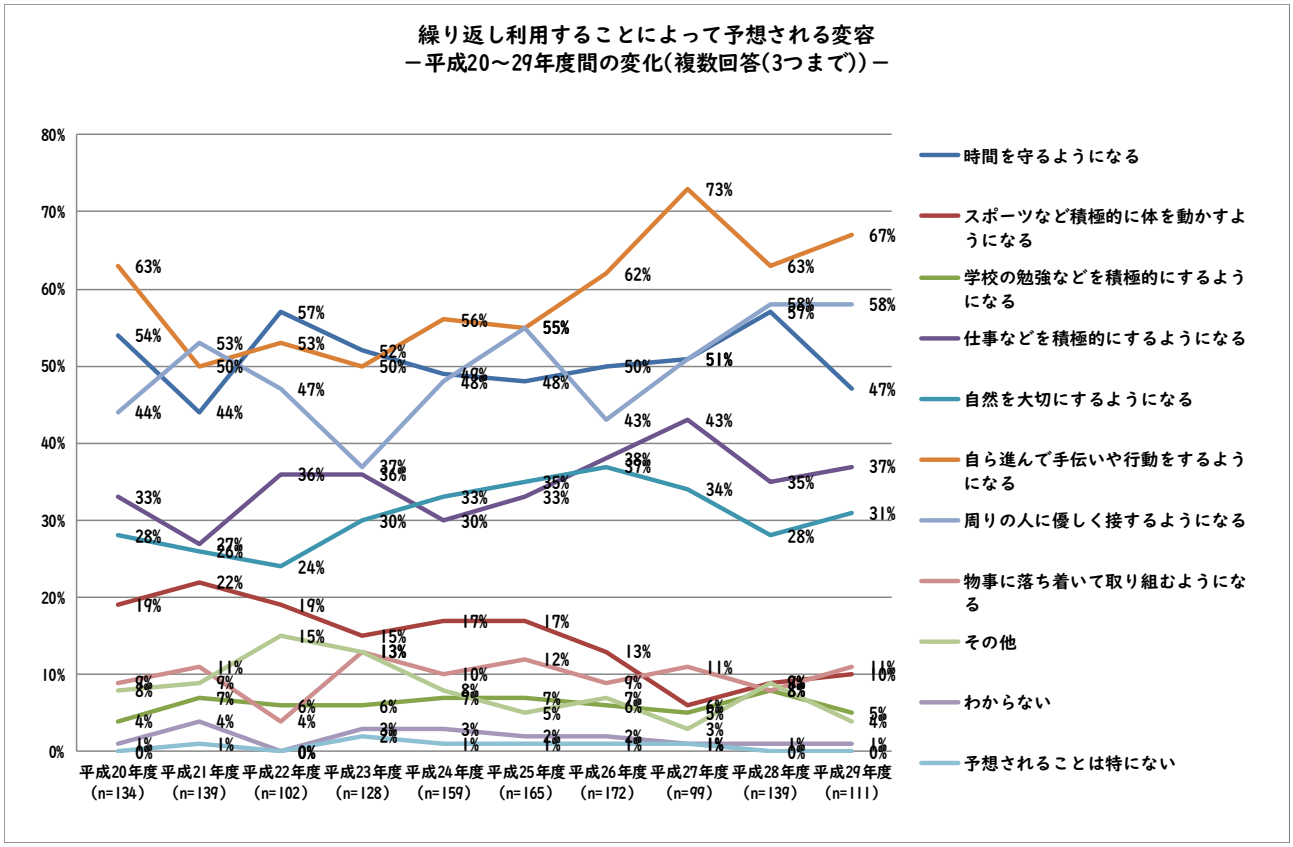


図14　繰り返し利用することによって予想される変容－平成20～29年度間の変化－

Ⅳ　調査結果のまとめと今後の課題

1.　調査結果のまとめ

(1) 利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）については、小学校相当が殆どを占めつつある。例えば、「小学校」では、1～3年目は20%台であったが、11年目で60%台に達し、「7～12歳」では、4年目までは50%前後であったが、11年目は8割近くに達している。

(2) 利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は11年間を通じて常に最も比率の高い項目で、特に8年目からは70%前後に達している。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10%台で推移している。その達成度については、「だいたい期待通りできるようになった」は11年間を通じて70%以上の比率である。「期待以上にできるようになった」は5年目までは10%台で推移していたが、特に9年目以降は20%台に達している。

(3) 利用後の参加者の変容について、「周りの人に優しく接するようになった」について述べると、その比率は11年間で18ポイント上昇している。「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」および「仕事などを積極的にするようになった」も同様の傾向で、11年間でそれぞれ13ポイント、12ポイント高まっている。

(4) 繰り返し利用することによって予想される変容について、調査が行われた10年間とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」が上位3項目で変わりない。但し、2年目（調査初年度）と10年目の比率差については、「時間を守るようになる」と「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」は10ポイント以内の差である一方、「周りの人に優しく接するようになる」は14ポイント高くなっている。

2.　今後の課題

本調査は回収サンプルの偏りがあるため即断できないが、11年間分の傾向を一応の仮説として捉え、今後検証していくことが期待される。そのポイントとして次の2点が挙げられる。

(1) 11年間変わらない項目としては、利用目標の種類の「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率が高い。またその達成度については、「だいたい期待通りできるようになった」が常に70%以上である。

(2) 11年間で変化が見られる項目としては、利用後の参加者の変容についての「周りの人に優しく接するようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「仕事などを積極的にするようになった」の比率が高まっている。繰り返し利用することによって予想される変容については（10年間分）、「周りの人に優しく接するようになる」のみ比率が高くなっている。